

腹腔鏡下大腸癌手術 発生からみた筋膜解剖に基づく手術手技

加納宣康 監修
三毛牧夫 著

＜書評者＞ 山口茂樹（埼玉医科大学国際医療センター教授・
下部消化管外科）

本書『腹腔鏡下大腸癌手術―発生からみた筋膜解剖に基づく手術手技』は、著者の三毛牧夫先生の大腸癌手術、特に臨床解剖に対する熱い情熱のこもった1冊である。以前どこかで感じたことのある、本書の読後のこの感覚は、しばしば本文で登場する故・高橋孝先生が長く在籍された癌研病院で味わったものと似ている。私は出身教室での研修を修了してすぐに癌研病院で研修する機会を得たが、どのスタッフも手術に関してこだわりがあり妥協がない。時には激しく口論し、意見を戦わせていた。本書を読んでそのときのなつかしい感覚と、長年こだわりの手術を積み重ねてこられた三毛先生の情熱が重なって感じられた。

内容を見ると、特に左側結腸と直腸の筋膜、剥離層について多くのページが割かれている。特に

Toldt の癒合筋膜の癒着不全状態であるS状結腸窩について、私自身も認識はあるものの、これだけ詳細に記載されたものは今まで見たことがない。また一般に腹膜を裏打ちする筋膜とされる腹膜下筋膜 subperitoneal fascia と、直腸間膜を包み込む直腸固有筋膜は現在の大腸癌手術の剥離層の指標として最も重要な筋膜であるが、これらについては発生学的な見地と実際の手術の経験から独自の理論が展開されている。最近の組織学的検討や、ビデオによる剥離層の議論により標準的な術式はかなり洗練されてきている感があるが、術中見えていない部分の解剖、特に筋膜の連続性、非連続性についてはまだまだ検討の余地がある。

右側、左側結腸切除については、血管の基本構造とともに大網の発生、構造について記載されている。

特に脾彎曲部の処理には、結腸、脾、膵の3つの臓器と大網、結腸間膜で構成される網嚢の構造の理解が不可欠であり、図と解説によりその攻略法がわかりやすく記載されている。

最近では技術認定制度の定着とその難易度の高さもあり、手術のテクニックのみが注目されがちであるが、1つひとつの用語の定義の確認、目的とする構造物に達するまでに切離、または温存する膜構造の理解は、三毛先生のいうように大変重要である。ただし膜構造の解剖はまだ完成されたものではないので、手術を進めるうえで必要なものから術者の頭の中で整理しておくべきものである。本書は美しいシェーマとともに膜構造の理論が解説・展開されており、腹腔鏡手術のみならず開腹手術においても、その剥離層を考えてみるよいチャンスを与えてくれる書と思う。

●A4 頁232 2012年
定価12,600円
(本体12,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01476-2]
医学書院刊